

千葉県相談支援従事者現任者研修 事例発表用ワークシート

(受講者氏名 記載例) (実地研修実施機関 ○○基幹相談支援センター)

イニシャル: A・S	性別: 男	年齢: 45	障害: 精神(統合失調症)
------------	-------	--------	---------------

基礎情報(障害に関する情報・制度やサービス等の利用状況等)

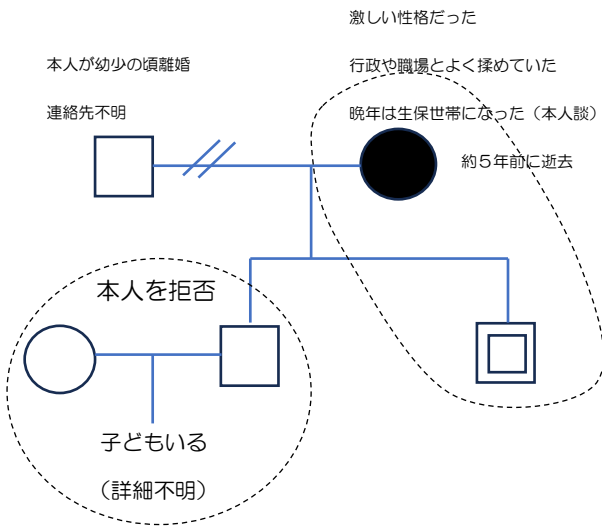
- ・精神障害(統合失調症)、単身生保(借家)、年金は納付要件が足りずに申請できなかった。
- ・家事援助を週2回利用(主に掃除と調理)。
- ・正社員になって生活保護を抜きたいとの思いが強く、フルタイムの仕事に就いても、職場の対人関係を思い出して帰宅後怒りになり、翌日には不安に変わり、欠勤を繰り返し～結果退職の繰り返し。
- ・精神科通院(月1回)不定期で相談員が同行。過去には窃盗で服役歴、また行政機関への大暴れで措置入院になったこともある。手帳は受けたくない「自分は前科者で、これに“障害者”が加わったら2重のハンディになってしまうから」とのこと。自立支援医療は受給している。

検討したい・助言を欲しいこと(事例の提供理由)

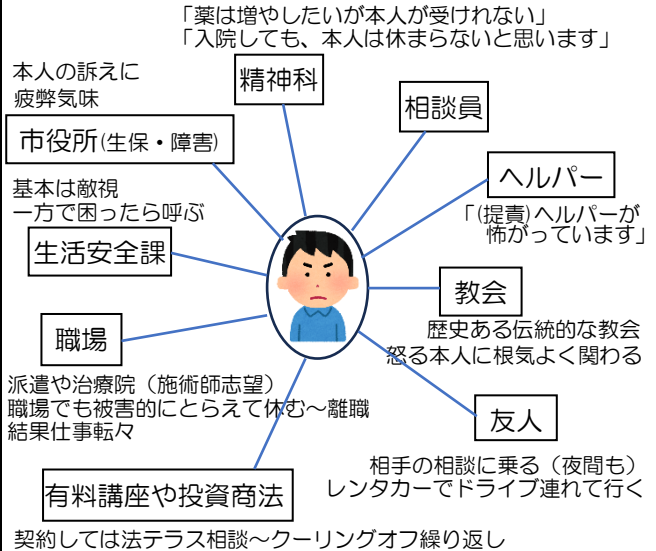
自分の思い通りにいかない(各種手続きや仕事など、また支援者の対応など)と、被害妄想(か念慮)も強くなり、感情を爆発させて相手を責めてしまう。特にヘルパーや市の担当者が疲弊してしまう。福祉サービスの就労支援を提案するも「障害者として諦めてしまう事になる」と拒否する。

- ①本人が自身の障害(疾患)を理解し、治療を受け入れ安定するためにどう関わるか、また就労を目標と考えると、障害を受容して就労訓練や就労支援を受ける事が望ましいのでつなげたい。
- ②支援者(ヘルパーと市の担当者)がつぶれてしまわないための、本人との良好な関係づくりは?

ジェノグラム



エコマップ(フォーマル・インフォーマル)



相談に至った経緯(本人や家族の希望・主訴)

- ・母が亡くなり単身となり、役所の提案で居宅介護(家事援助)を利用開始、相談員がついた。
- (本人の希望(計画書)): 以下、本人の言葉そのまま
- ・「就労して自立する意思がある」
 - ・「仕事で疲れるので、家事を手伝って欲しい」
 - ・「手続きや対人関係で行き詰まった時に、相談して解決したい気持ちがある」

生活歴

- 本人が幼少期の頃に両親が離婚、母と兄との3人世帯で育った。
- 勉強は大変で素行も問題があり、中卒後無職の時期を経て定時制高校進学～卒業。（高校の先生は親身になってくれた、在学中に精神科初診した（20歳過ぎてから））
- 看護学校に入学するも（女性ばかりで）、仲間もできず数カ月で退学。
- 20代で窃盗～服役歴あり、その後自宅に戻り母との生活（兄は独立）。行政サービスの公務員（本人を敵視しやすい）に対し大暴れし、措置入院したこともあった。
- 仕事は短期間で転々、職業訓練で知り合った知人（障害）とは現在でも交友あり。

本人像・ストレングス

仕事への意欲（生保を抜ける）は強い。「一発当てて成功者になる」期待もあり、各種投資や商法と契約～クーリングオフする事を繰り返してしまう。おそらく発達の偏りがあり、手続きや段取りなど要領は良くない、勘違いもある。障害を受け入れることへの抵抗は口にするが、通院・服薬も続け、相談員を頼る面もあり、葛藤があると思われる。また、障害仲間への面倒見がいいことが強み。

相談支援専門員の見立てと対応の経緯

- 相談員は当初、統合失調症による被害妄想と思考障害に注目し、医学的視点や本人を諭す助言ばかり行っていたが、本人の反発からクレームや不満の手紙を送り付けられるバチバチ関係が続いた。
- 関わるうち、受診同行の道中の会話を通して、またヘルパーや市の担当者や教会の職員とも情報共有を行い、「諭す」から→本人が「後で気づくことを促す声掛け」にシフトし、何とか関係維持中。

その他の情報

- 20代で服役したこと、また役所で大暴れして措置入院になったことで、「現在はこれ以上やったらまずい」というリミットは分かっている（本人談）
- 服役も措置入院も“強制的な収容”だったため、精神科への自発的入院にも抵抗感が強い。
- 家事援助が始まると、「自分の私物が無くなった（←実際は自分の勘違い）」「ヘルパーの態度が冷たかった（←本人の言動にヘルパーが緊張していた）」と、被害感から事業所へクレームの連絡が繰り返し入ることで、入られるヘルパーが減り、事業所も疲弊気味。

※ 演習で得られた助言・気づき（演習（1日目）の後記入）

※ インターバルで得られた助言・気づき・対応のアイデア（インターバル実習後記入）